



平成元年度年次晩餐会・挨拶する山田会長(壇上)

# 平成元年度年次晩餐会

## 皇太子殿下もご出席

### —今西・篠田両氏が名誉会員に—

グラスを片手に、肩をたたき合い、旧知の顔を求めて、おちこちで談笑の渦が巻き、輪となって広がっていく。受付開始、簡易バー開設を待ちかねたように、富士の間ロビーでの会員交歓は、まさにこれから始まろうとする、平成元年度の年次晩餐会への、プロローグに相応しいものであった。

旧ろう十二月二日、アルカディア市ケ谷で開かれたその晩餐会には、皇太子殿下をお迎えし、大阪で開催された「アジアフォーラム」参加のため来日した、ネパール登山協会役員のハルカ・グルン博士以下、全国各地より四

百三十名の会員が出席。この数字は、日本山岳会が始まって以来、空前のものとなった。

式次第は、松田雄一総務担当常務理事の司会により進められた。

冒頭、挨拶に立った山田二郎会長は、会長就任に当たってすでに所信表明した①命を大切にしよう②仲間を大切にしよう③自然を大切にしよう、の三点にふれ、特に①については、事故の教訓をどのように生かすか、「気の毒だ」「いい奴だった」という感傷的なものでなく、厳密に教訓として残す啓蒙教育や、中高年・一般登山者の指導が必要素だとし、③については、岩雪山の冬期オリエンティックコース問題にふれ、会として関係先に要望書を提出しているが、本部・支部が一体となって、自然保護に立ち向う必要性を訴えた。

また、タンポチェ僧院再建にもふれ、

挨拶に立った今西名誉会員は、「私が入会した一九三六年(昭和十一年)は、立教大学がナンダコート登頂を果した記念すべき年であり、旧朝鮮への遠征、戦後は篠田支部長のもと、関西支部のお手伝いに始まり、十数年の間支部長も務めさせていただいた。マナスル登山隊のメンバーにも加えていた。先の三國友好登山にも参画させていただいた。特に会長在任中は、皇太子殿下、三笠宮寛仁親王殿下にご入会いただき、顧みると山岳人として非常にしあわせな生活を送らせていただいた」と感想を述べられた。

次いで松田常務理事より、会員番号

から新名誉会員・今西寿雄、篠田軍治両氏、新永年会員・橋真琴、川崎堅太郎氏について略歴紹介があり(別項参照)、当日出席の今西名誉会員に名誉会員章が贈呈された。



1990年(平成二年)  
1月号(No. 535)

社団法人 日本山岳会  
The Japanese Alpine Club  
定価一部 150円

## 目次

- 平成元年度年次晩餐会……………(1)
- 海外の山……………(2)
- 「八十年代の山を考える」  
全国支部懇談会「89 伯耆大山の集い」……………(3)
- 支部事務局担当者会議……………(4)
- 追悼 古市義孝評議員を偲んで  
中嶋正夫……………(5)
- 東西南北……………(5)
- 「モンゴルの山について」「早池峰フォーラムに参加して」「会報『山』編集者の任を終えて」「出頂の茶屋は絶頂の茶屋だった」「海外トピック」……………(9)
- 自然保護随想……………斉藤 桂……………(10)
- 図書紹介……………(10)
- 「北岳のうた」「マウンテン・ワールド」「わが山、常念山脈」「娘捨山の文学」……………(13)
- 報告……………(13)
- 「新入会員の集い」「温泉を科学する」「雨具をめぐるシンポジウム(1)」「第22回図書交換会」「北海道夏山行」「熊本支部秋季例会」……………(17)
- 要望書……………(17)
- ルーム日誌、タンポチェ僧院再建協力募金者芳名、お知らせ……………(17)
- 図書受入報告……………(18)
- 新入会員、住所表示変更……………(19)

▶日本山岳会事務取扱時間  
月、火、木、土曜 10時～20時  
水、金曜 13時～20時  
日曜・祭日は休み  
▶図書室開室時間 除く毎日  
日曜・祭日・月曜を除く 13時～20時

会員各位のなご一層の協力を要望、しめくくりに登高行第五年をひもととき、故榎有恒名誉会員の記述を紹介した。

物故者三十二名(別記)への黙とう

のあと、山田会長か

お知らせテラフ電話  
234 六六五九

三桁の十氏について近況報告がなされる。

その十氏は、伴野清(二八四)、麻生武治(五二九)、中沢真二(六二三)、九十八歳の最高齢)、野口末延(八〇六)、中川喜久雄(八一五)、早川種三(九二三)、三田幸夫(九二四)、吉沢一郎(九三〇)、広瀬潔(九三二)佐々保雄(九六九)の各氏。

当夜は吉沢、佐々兩名譽会員がお元氣な顔を見せられ、出席者一同の割れんばかりの拍手を受けられた。

また佐々名譽会員は、「皆さんの健康と山の幸を願って」と、乾杯の音頭もとられた。

会食・テーブル懇談では、今回は特に支部会員が中心にテーブルマスターを務め、四十二の円卓名山は早くも盛り上りを見せた。

宴半ば、挨拶に立ったネパール登山協会役員のハルカ・グルン博士は、「皇太子殿下を会員にお迎えしている日本山岳会は開放的であり、その点イギリス山岳会は閉鎖的である」と会場を沸かせ、「本日、十七時にマニラに向う予定が、フィリピンのクーデターで、はからずもこの年次晩餐会に出席できなかった」と、旧知の山岳人との邂逅を喜び、「三国は顔色も同じ、従ってジャケットの色もそれにより決めた」と、三国友好登山の裏話しも披露、この部屋の

## 海外の山

### 八十年代の山を考える

二十一世紀まで残すところ十年。世紀末、登山界がどのように推移するかを観測する資料として「海外の山」にとって、一九八〇年から八九年までの十年が、どんな時代であったのか、振り返ってみよう。

まず、チベット地域を始めとする中国の辺境の山々の解禁は、八十年代の登山を語る上で不可欠の要素である。その先陣を切った日本山岳会隊がチョモランマを北東稜、北壁からおとしたのが、八十年五月。大所帯の隊編成に批判はあったものの、チベットに外国隊として四十年ぶりに入れたのは、幸運だった。中国の山の開放により、それまでネパール、インド、パキスタンにもっぱら集中していたアジアの高峰群は、可能性をぐんと広げるに至った。エベレストの本来の名としてそのチョモランマというチベット名が定着したのも八十年代の産物と言えるだろう。一方でネパール政府は、外国名をつけられていた三十一座の山々の改名を発表(八四年)、世界最高峰は、こちらではサガルマータのネパール語名で呼称されることとなった。ヒマラヤが、外国探検家や登山家だけのものではないことをこれらは静かに教えている。

長い間、人類の憧れの地の一つだったエベレストことチョモランマあるいはサガルマータ峰に通算二百人も人間が立ったのも八十年代の出来事である。中には「五度登頂」という強者も二人(ネパール人)おり、一九五

三年初登頂当時なら信じられないほどの賑やかさだ。

個人では、ラインホルト・メスナーの八千峰十四座登頂を特記しないわけにはいかない。八十年八月、チョモランマを北東稜から単独無酸素登頂したことに伺えるように、八千峰を酸素の助けなしにアルパイン・スタイルで登ることをメスナーは、自ら実践した希有の登山家である。

同じく十四座全山登頂したポーランドのイエジ・ククチカは、登攀内容はメスナーをしのぐ素晴らしさだったが、十一月号でふれたように、惜しくもローツェで遭難死した。ククチカに代表されるポーランド勢の力にあふれた数々の登攀も八十年代を彩る流れの一つである。

「無酸素」「冬期」「アルパイン・スタイル」に代表されるヒマラヤやアンデスでの先鋭的な登攀に加えて、用具を使わないで困難な壁や岩に挑戦するフリー・クライミングの全盛とその国際コンペの出現は、この十年を象徴する出来事と言えるだろう。都市に作った人口壁で登攀技術を競うクライマーたちは、今やオリンピックを新たな舞台にしようとしている。

フリーで活躍中のリン・ヒル、初めて男性の協力一切なしに八千峰(ブロード・ピーク)に登頂したポーランドのチュルピンスカとバルモフスカなど女性たちの登攀スタイルも変わってきている。

中国の各地をはじめ日本人もさまざまな挑戦をやったが、どちらかというと、加藤保男、吉野寛、植村直己、山田昇、といった登山家の一連死の印象の方が強い。

環境問題が大きな課題となってきたのも八十年代の特徴だ。九十年代はこの課題が海外の山の全てに波及してゆくだろう。

(江本嘉伸)

海外の山

多くの人がネパールにいらつしやることを希望する」と、元観光大臣も務めた同氏らしく、誘致PRも行なった。

出席会員の歓談ははさんで、壇上にはアイヌウオークでは、日本人としては初の北極点に達した大西宏会員、中国・新疆ウイグル自治区・コングール峰に遠征した、京都カラコルムクラブ隊のメンバー・塚本圭一会員、平成元年度新入会員が続き、やがて大拍手のなか、皇太子殿下ご退席のときを迎えた。

恒例による支部会員の紹介。円卓名山はいささか乱雑となる。

藤井正彦総務担当理事から、翌日の晩餐会記念山行の説明があり、あわせて平成二年度の年次晩餐会について、特に申込み締切期日を厳守して欲しいとの要望がなされた。

時を移さず、松田常務理事が閉会を宣言、ここに平成元年度の年次晩餐会は幕が閉じられたのである。

名残りは尽きねど、団居は果てぬ今日一日の幸。静かに想う。

参加者はまさに、今日の一日の幸を心に秘め、一九八九年版『山岳』を手に、師走の街に去って行った。

最後に、当日の裏方を務められた各理事および各委員のご苦勞に対し、紙上からお礼を申し上げます。

(写真・武居台三／文責・高田眞哉)

# (物故会員)

設楽芳夫、山口弘司、反田邦治、石川竹世、高橋晋作、片桐盛之助、倭島進、望月孝、渡辺徳、上野博基、佐久間一嘉、仲西政一郎、山田昇、西堀栄三郎、佐藤耕三、横有恒、寺村泰一、菊井巳喜男、佐藤篤孝、新貝勲、馬場哲也、田中健康、曾山志計雄、福田文二、及川敬一、野口秋人、吉村健次郎、木南金太郎、白井昌一、原始、小野利次、古市義孝。

## 〔新名譽会員紹介〕

今西壽雄(一六四九番)

大正三年九月九日生 京都大学農学部農林工学卒 紹介者は宮崎武夫、盛岡英治郎。

主な山歴は次の通りである。

一九三五年三月 鹿島槍ヶ岳北壁初登攀

一九三五年七月 鹿島槍ヶ岳荒沢南稜初登攀

一九三六年一月 朝鮮済州島初登頂

一九三八年八月 内蒙古旅行

一九四〇～四一年 冬の樺太大樺行

一九五三年ポスト アンナプルナ四峰試登

一九五六年プレ マナスル初登頂

一九八八年プレ 中・日・ネチヨモランマ・サガルマ

タ三国友好登山

本会では関西支部長、会長などを歴

任されたほか朝日賞、毎日スポーツ賞を受賞。昭和五十三年四月には黄綬褒章、同五十九年十一月には勲四等旭日小綬章を受章している。

篠田軍治(一八八七番)

明治三十七年三月十七日生 京都大学工学部大学院卒 阪大応用物理教授 紹介者は盛岡英治郎、水野祥太郎。

大正八年針ノ木岳登山に始まり、松本高校―京大の間、日本アルプスの山行を重ねる。戦後再建されたJAC関西支部初代支部長に就任、昭和三十六年には大阪大学第一次P29峰遠征隊々長などを務めた。

日本応用物理学会々長、日本学術会議会員、勲二等瑞宝賞を受章、現在阪大名譽教授である。

## 〔名譽会員となった感想〕

今西壽雄氏

たいへん幸運に恵まれて以上(紹介欄)のような登山が出来ました。日本山岳会会長就任期を通じて、副会長、

## 報告

### 全国支部懇談会「'89伯耆大山の集い」

山陰支部設立四十周年記念

ホテルで開催された。

全国支部懇談会「'89伯耆大山の集い」は十月二十八日・二十九日の両日、鳥取県米子市皆生温泉、皆生グラウンド

理事、会員の皆さんのご支援によりよい仕事をする事ができました。全く幸せなことであります。

篠田軍治氏

現在病氣療養中であります。

## 〔新永年会員紹介〕

橋眞琴(一七七七番)

明治三十四年十一月十三日生 関西学院大学卒

紹介者 中山、前田

川崎堅太郎(一七九二番)

明治四十四年八月三十一日生

紹介者 高頭、藤島(玄)

## 〔永年会員となった感想〕

橋眞琴氏

米寿を迎えた私の健康は、山の精気に育まれた貴重な賜物です。御盛会をお祈りします。

川崎堅太郎氏

小生の様に何ら日本山岳会の役に立っていない者が、永年会員になり恐縮に存じます。



全国支部懇談会・支部交歓会

て、若千二十八名の山陰支部主管で行なわれた。東京をはじめ、全国十八支部から一八〇名以上の方々の御参加を得て、盛大な晩餐となった。

午後六時開会。港叶山陰支部長の歓迎の挨拶。つづいて山田二郎会長による挨拶があり、支部の活動の重要性と大山の思い出を混えて話された。山陰支部生みの親、故織田収氏の冥福を祈って、全員一分間の黙祷をした後、支部友の会の渡辺守会長から、毎年続けられた上高地、九重、尾瀬、白山、石鎚、高千穂への山行、地元大山での秋の山行など、山陰支部へのお礼と四十周年行事への祝辞が述べられた。チョモランマ登山隊名誉総隊長、橋本大蔵

大臣の祝電披露があつて後、今西寿雄前会長の乾杯の音頭で懇親に入った。宴もたけなわとなり、北は北海道から南は宮崎まで、次々と支部紹介がなされ、お国自慢が出され、会場は大いに盛り上った。また会場の一角には、解禁したばかりのベニズワイガニが山と盛られ、大山山麓の新鮮な牛乳とアイスクリームも食べ切れぬと思われる程であつたが、アツという間に売り切れの好評に、支部会員の努力が報いられた。

二十九日(日)は前日までの風雨もお

## 支部事務局

### 担当者会議報告

十月二十八日十三時三十分  
場所 皆生グランドホテル

#### 〔出席者〕

村木副会長、港山陰支部長、松田、藤井、西村、石橋、穴田各理事、小倉常任評議員、神崎、中川、奥谷、内藤、藤田、堀の各総務委員。柴田(山陰支部)、平野(北海道、佐藤(秋田)、村上(山形)、佐々木(宮城)、佐藤(越後)、金子(信濃)、石間(静岡)、中世古(東海)、高木(岐阜)、四手井(京都)、石坂(富山)、水谷(関西)、井上(山陰)、深田(福岡)、西(東九州)、奥野(熊本)、大谷(宮崎)

さまり、山陰支部友の会のメンバーを含めて百名以上が大山頂上を目差した。山頂付近は霧におおわれ、三六〇度の展望を楽しむことはできなかったが、冷えた頂上小屋での薄茶の接待に、暖かい会話が広がった。元谷に下った頃には陽もさし、紅葉のまっ盛りな大山北壁が、全国から訪れた会員達にそのすばらしさを見せてくれた。

来年は山形支部。蔵王での再会を楽しみに大山に別れを告げた。

(長田健三)

懇談会の経緯と事務局担当者会議の意旨についての意見が述べられた。支部からの問題提起としては、支部代表として関西(水谷)、東海(中世古)、山陰(井上)、京都(四手井)の各氏より、それぞれの意見がのべられた。

ついで、これら質問については回答し、種々の討議が行われ、最後に松田理事がまとめを行った。即ち

#### 〔会議のまとめ〕

◎支部からの要望事項のうち、事務的に改善できるものについては、早速改善したい。

◎東海、関西の両支部より提案のあった支部ルーム設置の件……多額の出費を伴うことなので慎重に検討したい。

◎必要な図書については、重複図書の支部への委託保管を考えたい。

◎海外登山基金については、具体案がまとまり次第支部宛連絡する。

◎支部東京連絡員の制度については、種々の意見を戴いたので再検討したい

◎支部事務局担当者会議は年二回開催の方向で検討したい。

◎本日の会議を通じて得られた、次回会議の重点テーマは、「会員の高齢化対策と若返りの問題」であると考えられる。会員制度(会友、準会員等……)の問題も含めて次回のテーマとした。

(松田)

#### 〔議事〕

会議は、村木副会長の開会の挨拶、港山陰支部長の歓迎の挨拶につづき、会員に関する現状報告(松田)、会員アンケート調査報告(西村)、海外登山基金の設置について(西村)、県別名山選択についての協力依頼(村木)があった後、自己紹介があつて第一部を終了し、午後三時より第二部「問題提起・討議」が行われた。

総務委員会からの問題提起(中川)として、

(1)会員が相互に山の情報を交換し合える体制づくりについて

(2)女性会員全国集会

(3)支部東京連絡員の設置について

の説明の後、神崎総務委員から、支部



追悼

## 古市義孝評議員を偲んで

中嶋 正夫

「あゝ、疲れた、思うように足が進まない、おれはここで待っているから頂上迄行つて来らんしょ」と言つて古市さんは座り込んだ。それは去年三月初春の安達太良、箕輪山の頂上直下の雪面で、岳友二人と穏やかな春山を満喫しようと出掛けた時のことであつた。

下山後も本調子でなく大病院にて検診した結果、異常個所が見つかり、精密検査をするため、公立病院入院、間もなく手術をしたのが五月初めでした。胃の患部を切除し、今後の経過を見るよりないとのことでした。退院後は体力の回復に努め、仕事にも就き、今年に入つても悪化する様子も見えず、日帰りのスキーに出掛けてもおりました。大塚前副会長から依頼の評議員推薦のこととお話したところ、快諾され安心しました。その後気分がよい時は一人で山に入り、吾妻山を散策していたようです。夏も過ぎ九月に入ってから急に食欲も落ち、不快が続くとのことで再入院し、再手術が十月初めでした。結果は最悪の事態になっていました。後日奥様のお話ではここ七年ぐらい健康診断を受けていなかったとのことである。健康でどこも悪い所はない、そんな理由も

## モンゴルの山について

田部井 淳子

モンゴルにはスポーツ協会の中に登山協会があるが、各々の党の元にスポ

ーツ委員会があり、山岳もその中に含まれている。

今夏(一九八九年七月)、私たち女子登山クラブは二年來の文通が実を結び、労働省軽工業スポーツ委員会の招きで、モンゴル女性登山家たちとハルヒラー山脈内院のツルゲン山群の最高

あつたようです。しかし過去に何らかの自覚症状があつたのではないだろうか。結果を聞くのが恐ろしい、それが常日頃病氣もしたこともない、健康体と自負している者の弱いところでもある。追悼文としてふさわしくないが、敢えて私をも含めて老境に入つた数多い会員に警鐘を打ちたかつたのである。古市さん、お赦しの程を。

古市さんは、戦後間もなく福島支部を設立した翌年の昭和二十三年に入会し、持前の明るさ、行動力は支部の皆さんから慕われ、先輩連からは頼られ、冬山合宿、集會に、中心的な役割を果たして、支部の事務局、常任委員の責務をこなしてこられました。

また福島県岳連にも関係し、第六回、第七回の国体に大山、鳥海山と選手、監督として参加されました。各大会、研修会の運営に当り、事務局、理事を経て六十一年からは副会長として重責を果たし、現在の日本山岳会福島支部、福島県山岳連盟に育てあげて戴きました。よくなたら別々に行つていたネパールに再度一緒にゆつくり行こうではないかと話し合つていたのが残念です。JACの還暦赤セーターを着て。終始「人の和」「協調性」をモットーとして仕事も山も貫いてこられたことは今更ながら頭が下ります。あの張りのある、よく通る声が聴けなくなつたのが淋しい限りです。ご冥福をお祈りします。(会員番号三二一七 平成元年十一月六日歿)

峰ツアガン・デグリー(四二〇〇呎)に登ることが出来た。

モンゴルで驚いたことは登山が非常にポピュラーで各個人が岩登りや、ハイキングを楽しみ、週一度は会合を開いてトレーニングの話や、登山の話をしているということである。モンゴルの首都ウランバートルから約八十\*の所にドホン・ハットという岩場があり、日曜日になると岩登りの競技を楽しむのだという。四年に一回、ソ連、ポーランド、チェコなど外国の人を交えて試合をしたり、モンゴルの山やソ連の山に登るといふのだから驚く。私たちは女性隊なので、モンゴルの登山隊も女性ばかりがくるのかと思つてしたが、なんと隊長はスポーツマスターで中学校の校長をしている五十七歳のナイダンさん、副隊長はやはりスポーツマスターで工場に働く三十八歳のバインツアガさんの男性であつた。彼は一七五\*、六十五\*のいかにもきたえぬかれた筋肉の持主で冬はスキーを、そして毎日の仕事が終わった後では、バレーやピンポンをし、岩登り大会にも出ている。山の用具や装備にもくわしくモンゴル隊としてヒマラヤへの遠征を熱望していた。隊員は全員女性で私と文通をしていたイッチンノルブ(五十七歳)さんを最年長とし平均年齢四十一歳の隊員たちである。私たちとの

合同登山を希望する人が多く、六十人の中から私たちは選ばれたのですよと誇らしげに語ってくれた。

ウランバートルから一二〇〇\*離れたウランゴムにもオプスアイマグの山岳愛好者たちが出迎えてくれ、地元の人たちも一緒に登ることになった。彼らもデグリーという名の山岳同好会を作り週一度集ってトレーニングしているという。モンゴルは地理的にソ連や天山山脈に近いし、山岳愛好人口はかなり多いから、近い将来モンゴル人だけの遠征隊が出ることだろう。

しかし、今は装備の点で外国との合同登山を熱望しており、日本人がモンゴルの山にくることも歓迎している。

## 早池峰フォーラムに

### 参加して

坂倉 登喜子

早池峰山麓の大迫町自然の会の主催で、郷土の最大の宝であり誇りである早池峰の自然を守り大切にしよう、と去る九月三十日と十月一日の二日間、大迫町体育館において、岩手県自然保護協会その他、新聞社各報道関係の後援で、早池峰フォーラムが開催された。一昨年催行したヨーロッパ・アルパイン・ツアーに参加した、大迫山岳博物館々員の近村晴男氏から早池峰山の

植物写真の展示室に、世界のエーデルワイスの花の写真を集めて展示したいと言う希望を聞いていたので、私のコレクションの一部を展示協力しようとして話し合っていたため、今回の早池峰フォーラムに招かれて出席したが、ここで計らずもJAC岩手支部の高橋亭夫氏に再会し、写真集『岩手の山やま』の寄贈を受けた。

第一日は午後一時より会場には、大迫町長はじめ、自然保護協会関係、岩手県内の山岳会、早池峰の植物に興味のある人達が集り、早池峰フォーラムが開催された。

最初に自然の会々長の早池峰フォーラム開催の挨拶その他があり、「みどりの早池峰」(村田柴太作詞)の子供達の合唱があつて第一部が終った。

そして午後三時より講演会に移り、「エーデルワイスに魅せられて」の私の話の後、「早池峰山」(田中利一撮影八、映画よりのビデオ)とスライドの映写後、大迫中学校教諭・畠山茂雄氏の「早池峰の価値と未来」、尾瀬長蔵の「小屋・平野紀子さんの「尾瀬を愛し、尾瀬に生きる」の講演があり、夜は自然の会の皆さんと夕食を共にし懇談した。後から村田前町長も出席されて皆で歌を合唱して会は盛り上った。そしてその夜は町長宅に宿泊させて頂いて、村田柴太氏から博物館の話や、エ

ーデルワイスの会社に勤務の息子さんから、ワインの話などをして頂いた。

### 薬師岳記念山行

第二日は早池峰山に相対する薬師岳の記念山行が二十数名の参加を得て行われるので、私も参加した。

この山は早池峰山とは全く異った地質の山で、植物帯も違って夏行った時は頂上付近の岩場にイワウメやイワヒゲが群落していた。登山路は素朴な岩道で、頂上付近は岩山でまだ静かな山頂を保ち、前の早池峰に比して登山者は少ないとか、今秋はナナカマドやドウダンツツジ、カエデなどの紅葉が燃えて山肌を色彩り、早池峰山も紅葉の裾模様を装って、大きくどっしりとした姿を見せていた。岩の頂上で平野紀子母娘お二人と昼食を共にして下山した。

この日は体育館で秋田県自然保護協会理事・鎌田孝一氏の「白神山地を守る」と、版画家・高野玲子さんの「どんぐりと山猫」の講演があり、体育館の二階では、宮沢賢治作の童話「どんぐりと山猫」の銅版画作品展が併催され、大迫自然の会の文化的事業が熱心な青年の方達の努力で催行された。

日本で只一つの町立大迫山岳博物館を、いずれ町内に移築して、早池峰山の自然の総てと歴史を残すため、内容を充実する将来のビジョンがあると

う話を聞き、私も資料展示に協力することを約し、午後五時頃自然の会の皆さんと別れ、大迫町を後に新花巻駅まで車で送って頂き、新幹線で帰京した。

## 会報『山』

### 編集者の任を終えて

岡沢 祐吉

### ① スタートのころ

今から十年前の昭和五十四年四月、まだ元気だった山崎安治氏の突然の電話で、編集経験のない私がこの会報『山』の編集をすることになった。断れば多分、日本山岳会にはいられなくなったと思われるほど強圧的な感じがした。

日本山岳会というところは、弱いものいじめの得意な集団だな、という感じをその時抱いた。そして、その点は今になっても変らないのではないか、という気がする。言葉は丁寧だが、かなりきついことをおっしゃる。

この姿勢は或る点で、今日の日本山岳会の強さを、良い意味でも、悪い意味でも表わしているように思う。

今西錦司元会長が「山岳学」という言葉を使われていたが、これが学問の体系の一環と世間一般から認知されないう限り、日本山岳会の依って立つ合理的

的基盤は磐石とはいいい難い。とする  
と、見方によれば不合理な頑固さを押  
し通す以外に、その存続を守る根拠が  
無いとさえ言えそうだ(伝統とか、過  
去の実績といったものが、現在の存続  
を客観的に認めうる根拠なのかどうか  
は、万有引力を知る一つのきっかけの  
例え、ニュートンのリンゴほどの説得  
力さえないように見える)。

右から圧力が加われば右へ揺れ、左  
から圧力が加われば左へ揺れるでは、  
何とも頼りなく傍目には見える。

それはとも角、丁寧だがきついその  
お言葉には、こういった頼りなさを吹  
き飛ばす力があった。

こういった日本山岳会の保護の元  
で、会報編集者だけでなく、日本山岳  
会の役員などその運営に当るものは、  
それぞれ自分に与えられた責務を果た  
していくことになるだろう。

高校でも、大学でも、教わったこと  
が社会に出てすぐに役立つことは、特  
定の分野を除くと少ない。学校の成績  
が優秀でも、その出来のいい科目につ  
いての仕事がすぐやれるわけではな  
く、普通はつまらない仕事をさせられ  
る。

最近、教職にある人からこういうこ  
とを聞かされた。学校で成績優秀とい  
うのは、専門分野で修得した知識の確  
かさを知る目安というより、与えられ

たものを如何に正確に処理できるか調  
べる目安だ、というのである。

これは本会の会報編集者にもいえる  
ようだ。

私が会報編集者を仰せつかってから  
まもなく、前任者の大森久雄氏から、  
ごっそり原稿を引き継いだ。殆どが、  
JACの総会関係の原稿だった。編集  
のヴェテランの大森氏から手とり足と  
り教わる仕組でないところが、またこ  
の会報編集者の泣き所でもある。そし  
てこれは今も同じ状況のようである。

つまり本会の会報編集者は、まず初  
歩的な編集作業がこなせなければ務ま  
らないのだ。雑多な原稿(場合によっ  
ては印刷所からつき返されそうな原稿  
の書き換え、便せんに書かれたものの  
原稿用紙への書き直し)を、決められ  
た字数しか入らないスペースに、活字  
の大きさを決めながら埋めて(割り付  
けて)いくのである。よく遠征隊の立  
派な報告書が出版されることがある  
が、その報告書をまとめる人の苦勞が  
偲ばれる。しかし、その人が、商売と  
してやっているのなら、当然の苦勞だ  
とさえ思う。

さて、私がいちばん最初に原稿とし  
て受け取った総会の予算・決算書だ  
が、総会に出席された人ならこの印刷  
物がどのようなものかはお分かりと思  
う、それを会報一ページ大の割付け用

紙にどう収めたらよいのかちよつと思  
像して頂きたい。具体的に活字の大き  
さを何ポイントにするか、各行の間の  
間隔は使用活字の二分の一幅でよいの  
か、一行の字数は何字にするか、罫線  
の太さは何ミリか。こうして、会報一  
ページに収まる字数が具体的に決まる  
のである。

近頃は予算にも余裕が出て、増ペー  
ジも可能のようだが、最初の頃の十二  
ページ建ては、かなり厳しかった。増  
ページになると印刷代だけでなく、郵  
送料の増える場合もあるからだ。

素人の私が、こうした困難を乗り越  
えるには、市販の編集に関する本を買  
って、徹底的に読みこむ他には手はな  
かった。しかし、転勤や、配置転換で  
新しい仕事を覚えようとするばあい、  
このようなことは誰にでも経験のある  
ことだ。それができなければ、そこで  
のポジションを失うことになる。J  
ACの仕事でも、生業かどうかの違い  
はあるが、目をつぶって自分一人で頑  
張る期間が、少なくとも一年くらいは  
必要のようである。

これが済んで、やつと原稿の自身に  
目が届くようになる……届かせて頂け  
るようになる、といったほうが適切か  
もしれない。

ここにくるまで、毎月開かれる理事  
会で、会報担当者は、ただ聞いている

だけ、発言することは殆どなかった。  
そこまで手が回らないのである。しか  
しその都度、理事会に出される様々な  
議題についての結論が、いつも常識を  
逸脱しないのには感心した。変だと思  
われるような意見も、後には誰かの意  
見でそれが正されるのである。この理  
事会の雰囲気は会員全体に反映してい  
るのか、そのときの理事会が会員の総  
意を正しく掌握していたのかは分から  
ないが、会報に寄せられてくる原稿の  
多くは、初心者私を迷わせることは  
少なく、ほぼ二年、何とか無難に過ご  
すことができた。勿論、いくつかの問  
題、不慣れからくる誤植、といったミ  
スはあったが、日本山岳会は暖かくそ  
れを容認してくれた。

今、振り返って思い出して見ても、  
この傾向は、私の任期中、基本的に変  
らなかつたように思う。したがって、  
集ってくる原稿は、理事会で話題とな  
ったものが多かった。しかし、そのよ  
うな話題となったものについて、編集  
者のほうから原稿を依頼しても、これ  
に応じてくれるものは少なかった。色  
々な事情があるようだが、はつきりし  
た事情の一つに、そういった原稿の多  
くが商業誌のほうへ流れ、原稿料とな  
り、かつ自分たちの行為を衆知させう  
る手段になるということがある。それ  
を生業としている商業誌の編集者たち

の目は真剣である。残念なことに、彼らから拒絶された原稿が本会の会報に回ってくることもある。

日本山岳会の性格をよく知っている人は、こういうことはしない。また、このようにJACを知っている人は、会報向けに原稿の書ける人でもある。現在ある商業雑誌だけでなく、いくつ

もある山岳関係団体の機関誌との競合を避けながら、日本山岳会であれば出来ないものを作ろうとしているようにも受け取れる。

本会の会報編集者は、それぞれの生業を持ちながらの編集である。全部ではないが、原稿依頼に応えてくれない人々に、しつこく食い下がるにはどうしても限界が出てくる。それに会報は毎月一回で、待ったなしなのである。

## ② 原稿集め

日本山岳会の会報編集者の姿勢は、初期のころから一貫して変らないと思う。例えば会報五三号に、逸見真雄・松方三郎・中屋健氏の編集者三氏が連名で、次のように書いている。

「……会報を会員相互の連絡機関として、一層効率を大ならしめる傍ら、読み物としても発展させ、研究の材料も提供し、その上でできれば時代の動きを反映させようと思う。……」とある。また吉沢一郎名誉会員が編集者だったときは「わが会の特色たる多角的な会

員構成の色彩を出したい、山行方面だけでなく多方面の話題を載せたい」とあり、同じような趣旨で、昭和十四年ころの会報編集者だった、石原巖氏も「……我が会の特色たる多角的な会員構成の色彩は現われているように思えない。」と、多方面からの寄稿を促している。

但し、会報への投稿規定は何時のものにも載っている。現在のように四千名以上の会員に等しく門戸を開くとなると、この基準は守ってもらわねばならない。原稿の長さの例をとったばあい、四百字詰め原稿用紙で二枚半だと会報一ページの半分が塞がることになる。また各委員会関係の原稿、会務に関する原稿（このなかには追悼文の入ることもある）が、総ページ数の三分の二を占めるばあいもある。したがって、規定外の長めの原稿となったときは、事前に編集者に相談してもらったほうがよい。

原稿の出身についての取捨選択は、多角的な会員構成であるため、価値観にも相違があり、かなり難しい。前にも述べたとおり、日本山岳会の存在理由に、一般的に認められる科学的な根拠はないのだから、原稿の採否に基準などないとも言える。しかし、最小限、物理的な規定は守ってもらわねばならない。

今更という人もおられるだろうが、岩波新書に『自由と規律』という本があったのを記憶だろう。戦後、この本は自由の意味を履き違えている者への指針ともなった。最近この本を話題にしている文を見たので、ここに引用させてもらった。規律がなければ真の自由はないのである。その時々には会報に載る投稿規定は、単に編集者の恣意的な判断で決まるものではない。

原稿の出身についても、一般に専門分野が決まっているようなばあい、その分野の専門家のものを優先したり、疑問の出たばあいなどは、その方面の専門家の意見を参考にして、採否を決めることもあった。紀行文の中にも、自分の足で確かめず、誤った記述をしているものも時々あった。

日本山岳会の慣例として、会員同士すべて社会的肩書きをはずして付き合う、という建前から、会報でも専門家の原稿と素人の原稿が同等に並べられることになる。このようなばあい「餅や」のことは「餅や」に、を徹底するようにした。このため、執筆者が「餅や」であるか否かを確かめるため、直接、執筆者に連絡するばあいもあった。そして、直接連絡できなかったばあい、その原稿の採用を後回しにしたリ、取り消すこともあった。かつて或る雑誌の編集者と話をした

とき、例えば、「山の○○」のように「山の」と付くと世間一般には二流と思われる、との心外な言葉を聞いたことがある。残念ながら、今の状況では、一般社会で確かな評価を得たもののほうが、日本山岳会でも通用することのほうが多いようである。その辺を改善してゆくには、日本山岳会のメンバー一人一人が一般社会でも通用するようなものを身に付けていくことが必要のように思われる。

## ③ 終りに

以前、本会会員の堂本暁子氏から二十世紀の大きなテーマは「健康と宗教」だと聞いたことがある。また八十歳半ばを過ぎてもお元気に山歩きをされていた近藤恒雄先輩からは、「僕の宗教は山登りだ」とクリスチャンである同氏の兄弟に決して負けない、宗教と同等のものを持っているとの、自信に満ちた言葉を、同行した大菩薩嶺のどこかで聞かされた。

この会報の編集をやっていた九年の間も、毎月拙宅に送られてくるスイス山岳会の会報や、毎年送られてくるベルン山岳会の年報を見ていたが、私は欧米諸国の山岳会誌を真似ようという気にはなれなかった。その気になったら、多分息切れしたに相違ない。幸か不幸か、そのお陰で、日本山岳会の底流に、二律背反を超え、対立を統

合させようとする静かな流れのあるのを私は感じ取れたような気がするのである。

## 出頂の茶屋は

### 絶頂の茶屋だった

田畑 眞一

山村正光氏は『車窓の山旅—中央線から見える山』のなかで、出頂の茶屋についてふれている。これは節刀ヶ岳（一七三六）の記事中の挿話であるが「以下、私の推測。鯉沢から西山温泉に抜ける峠に出頂の茶屋というのがあった。この辺では、ザ行とダ行の発音が混用されており、例えば雑布をドウキンという。よって、絶頂をデッチョウと発音、出頂の字をあてた。これと同じ流儀で、絶頂ヶ岳。」といわれる。地域の事情にくだしい山村氏ならではであり、明解な見解である。この点に關し、岩科小一郎氏は「でつちよう（古語）甲州では山や峠の頂上をいう」（『世界山岳百科事典』）といわれる。ところで山村氏流でいくと、出頂の茶屋も絶頂の茶屋ということになると思う。山村氏は推測といわれる。謙遜も感じられるが、かつて出頂の茶屋は確かに絶頂の茶屋だった。昭和四年に出た流石英治他の『日本南アルプスと自然界』のなかには「絶頂の茶屋から

## 【自然保護随想】

### 登山道は、今

折立からの登りは踏跡がやっと判る位の細い道だった。熊の引つ掻きの跡が樹木帯でいくつも見られるよと里の人が言った。上部の湿原に入ると緑の原に湿原独特の黒い草木の道が一本細く長く続いていた。友と二人しかいない静かな山登りを愉しんだ。古い建物の太郎小屋へ入ると、往年の名ガイドの志鷹光次郎がいて松尾峠の遭難のとき横さんに貰ったと銀時計を懐中から出して見せてくれ、立山の話をしてくれた。なつかしくて三十年ぶりでまた折立から入ってみた。立派な小屋が建っており早朝なのに百人近くの人が登山準備をしていた。細かった小道は何人も並んで通れる幅広い道となり土が露出していた。

こう人が多いと熊も出て来やしまい。湿原に入るとひどいところでは四、五メートルの道幅になっており二、三センチの草木の下は赤土も抉られてごろごろした大小の石の道に

なってしまう。金網で幅一メートル位の俵のように石を包んだのが横に並べられそれで石段のような道に作られていた（伯耆大山では蛇籠というそうだ）。その石段に登り難いのか両脇に幅広い踏跡があり、さらにその脇の湿原に草土の黒い道がついていた。この石段は環境庁が一億円もかけて作ったと後で聞いた。

雲の平のテント場は一面の土でヘリが来ると土が舞い上っていた。登山人口が増えて皆の足でこのようにしてしまったのだ。ここだけではない。あちこちの湿原も足による破壊がどんどん起っている。

大山は八合目から尾瀬の木道より幅広い板道（高い櫓のように支えられている）が山頂まで続いていた。昭和四十六年の山頂の写真は一面におおばこで緑だった。今はその痕跡もない。土だけの山頂である。自然破壊のことで、アメリカのピータース博士がアマゾンの中で強調された言葉を新聞で読んだ「……まず実行出来るところから手を付け、その上で軌道修正していく方法でないと森は救えない」と、しかし森は救えても、湿原は戻らないのである。（斎藤 桂）

青柳へ」とまぎれもない記事がある。ただ、付図には「デッテウ茶屋」と旧かなづかいの表記をみる。山村氏の推測が当を得ていることが確かめられる。

そればかりでなく、「混同されており」を地でゆく記事でもある。さすがは山村氏だと敬服した。

なお、絶頂については昭和六年に出た山梨県山林会の『南アルプスと奥秩父』のなかの三角点高度表中にも「絶

頂」とある。あわせて海拔「一六一五」ならびに所在地「山梨県北巨摩郡旭村」をあげている。

## 藍綬褒章受章

本会越後支部所属会員、杉原八百樹氏（会員番号四五五二番）は、新発田市商工観光課の職員として（新潟県山岳協会指導員会の会長でもある）、多

年に亘る飯豊連峰の自然保護、登山施設の管理面での功績が認められ、この度、藍綬褒章受章の榮に浴した。

## 海外トピック

### ●ポーランド国際山岳フィルム祭

この度ポーランドの Katowice 山岳会長 Janusz Majer 氏より、田部井淳子会員宛、一九九〇年二月二十七日

三月四日にかけて Katowice で開催される International Festival of Mountain Film に招待した旨の来信があった。

### ●イタリー山岳会山岳スキーラリーに参加要請状来る

イタリー山岳会 VALFURVA 支部の支部長 Luciano Bertolina 氏より、一九九〇年五月六日(日)に ORTLES-CEVEDALE 山群のセニターレ山 (Mt. Cevedale) (三七六九m) で開催される 10th Trophy Edition "C.A.I. Valfurva International Mountaineering Sky Rally" に貴会チームを送って欲しい旨の招待が届いた。今回は五

### 「海外登山基金」による

#### 登山計画募集

海外登山基金委員会

標記の件につき既報の通り、海外登山振興のため、適当な登山計画に補助を行うことになりました。平成二年度分は左記の通り募集します。奮って応募ください。

- 一、補助金 三〇〇万円
- 二、対象 平成二年四月一日～同三年三月末に出发する登山隊
- 三、申請方法 所定の様式(山岳会事務局に請求のこと)による
- 四、申請締切 平成二年三月末日

月三日～六日にかけて同地で第一回の国際登山スキー会議 (International Mountaineering Sky Meeting) も開催される。

### ●タンポチエ僧院

#### 再建募金海外状況

エドモンド・ヒラリー

十月十六、十七日大阪青年会議所主催による第十回国際シンポジウムのパネラーとして大阪にいられたエドモンド・ヒラリー氏は今西前会長と面談、タンポチエ募金の各国の状況につき左記の通り報告、日本のノルマである、十萬ドル、(日本側の募金目標は一千万円)は、是非達成して欲しい旨要望して帰国された。

#### 〔既納入済〕

(U.S. \$)

- ・カンパニー、クーペのシムルンパの寄付.....50,000
- ・ヒラリーによる N.Z. での募金.....40,000
- ・ヒラリーによる一英国での募金.....50,000
- ・アメリカ・ヒラリー基金.....20,000
- ・National Geographic Society.....5,000
- ・アメリカ旅行業者協会.....1,000
- ・Sunday foreign Donation... 3,000
- 小計 US. \$ 169,000

#### 〔納入約束済〕

### タンポチエ僧院の再建に協力しよう (一〇、五〇〇〇円)

- ・カナダ・ヒラリー基金.....50,000
- ・アメリカ・ヒラリー基金 (Dick Blum).....50,000

再計 US. \$ 269,000

#### 〔期待中のもの〕

西ドイツ、スイス、日本 (募金目標は 500,000 ドル)

〔編者注〕ヒラリーの期待している日本の募金は本会の他、日山協、日ネ協会、日本ヒマラヤ協会、労山の五団体で募金中であるが、現在のところ二〇〇万円弱で、前途遠慮である。会員各位の一層のご協力をお願いする次第です。(Y・M)

#### 図書



#### 紹介

### 北岳のうた

#### 明峯山岳会六十周年記念誌

社会人山岳部の古参の一つ明峯山岳会が、創立六十周年を迎えたのを機会に、その足跡を回顧して上梓した記念誌である。

明峯山岳会(昭和四年創立)は、故内藤八郎氏を中心に運営されてきた会で、R・C・Cの海野治良氏が技術指導にあたり、ほぼ同じ時期に創立された東京徒歩溪流会、日本登高会などとともに活発な登山活動を展開してきた登山グループの一つとして知られている。上記二団体が主として谷川岳を中心に上越の山々と取り組んできたのに対し、明峯山岳会は他の山城とあわせ、早くより甲斐の北岳に集中登山を行うなど北岳をホームグラウンドとしてきた。この記念誌の書名もそれに因んだものと思われる。

本書の内容は四編から構成されており、第一編は会の創立からその変遷を綴った会の歴史、第二編は思い出に残る山行(登攀)の中から記録と回想、第三編はその時々の断章の数編、そして最後は会の歴史をつくった人々に対する追悼となっている。なお序文には杉本光作(遺稿)、羽賀正太郎、白簾史朗の各氏がそれぞれ寄稿している。本書は二十数年前発刊を企画し中断していた年報を、今回あらたに六十周年記念誌として完成したもので、膨大な資料の中からこれを要領よくまとめたおり、社会人山岳部六十年の歩みを色濃

く伝えている。

昭和の初期、まだ日本の山々に未開拓の部分が残されていた頃、その開拓の主流は学校山岳部であったが、この時期に誕生した社会人山岳部による地道な活動の記録も併せて評価されなければならぬ。半世紀を超える実績をもつ明峯山岳会のこの記念誌は、登山史の一つの側面を知るうえで貴重な資料となるであろう。

一九八九年七月八日刊、明峯山岳会発行、A5版、四四一ページ、頒価八〇〇〇円、照会先、〇三(九五)七〇三七 加藤正あて

(松家 晋)

## マウンテン・ワールド

### 全十九巻

スイス山岳研究財団編

吉沢 一郎他監訳

「マウンテン・ワールド」の名前を聞いた多くの人は、ヒマラヤ高峯の初登攀を競いあつた栄光の時代を思い起し、感慨の念にふけるであろう。本書は地球上のさまざまな地域の山岳に遠征隊を派遣したり、奨励したりすることを目標に掲げているスイス山岳研究財団が、世界の各地域の遠征報告を中心に、学術研究や著名登山家の追悼文等も含めて発行していた山岳年鑑とい

うべきものである。その美事な写真は定評があつた。第二次大戦の終わった翌年(一九四六年)にいち早く発刊され、当初はドイツ語で毎年出版し、エヴェレスト登頂の一九五三年よりは英語版も発行し、その後二年に一冊となつたが、世界の登山家の注目を集めていた。しかし、一九六七年に十七巻をもって「少数のかなり重要な遠征隊の代わりに、無数の毛色の変つた冒険隊が現われてくると、これらのすべてを本誌に収容することが不可能になつた」として惜しまれながら終刊となつた。今回その全十七冊にマルセル・クルツの『ヒマラヤ編年誌』二冊を別巻として加えた日本語訳が多数の方の協力により完結した。そこには人類最初の八千級級の登頂となつたアンナプルナに始まり、エヴェレスト、ナンガ・パルバート、と続き、中国隊が初登頂したシヤパンマを除く八千級級の十三座が登頂者を中心とした隊員により執筆されている。もちろんマナスルも偵察隊(高木正孝)、「信仰による登山妨害」(村木潤次郎)そして登頂(横有恒、今西寿雄)が報告されている。マウンテン・ワールドに含まれている地域はヒマラヤに限らず、南北アメリカ、アフリカおよび極地にも多くの頁を割いている。アフリカではチュニジアの三千級級の山、極地では北極圏のバフィ

ン島やインド洋の南に浮ぶ小さな孤島ケルゲレン島についても書かれている。まさに「ワールド」である。しかも内容は無味乾燥な技術的な報告ではなく、編集方針として「人間らしく生々しく表現された物語」を求めているので、読物として興味のあるものが多い。

各巻の冒頭には序としてその巻の編集の考え方が述べられていて、これを通読すると時代の流れが読みとれる。第十六巻(一九六六/六七)の序には、「アルプスで起つた最も注目すべき出来事は、いうまでもなくアイガー北壁での冬季の直登である。これをめぐって多くの活発な議論が闘わされたが、ほとんどは否定的なものだった。新しい登攀様式がその手掛りを得るか、あるいは、もうしばらく経験した後で再び消え去るかどうかはまだ問題であり、今のところ、解答は出ていない」と誌し、登攀者の「アイガー直登についての思い出」と共にF・H・シユヴアルツェンバッハの「直登登攀はるか否か?」と題する客観的批判、分析記事のせている。また「軽気球によるアルプス横断飛行」や地下の洞穴探検の記事もあり、かなり幅の広い分野に渡っている。編集者の立場はやや保守的とも思えるが、読者の判断に委ねる方針をとっているのであろう。全巻の記

事を紹介することは出来ないが、私が特に興味をもった二、三について誌してみたい。

アンナプルナ初登の翌年その隊員であつたリオネル・トレイ等により「フイツ・ロイ征服」が行われた。パタゴニアの柱状峰フイツ・ロイは高度は三四四一メートルであるが、その写真を見た人は誰でも心をとらえられるであろう。トレイは書いてある。「われわれにとつてフイツ・ロイは、八〇〇〇級峰よりも魅力的であり、魅惑的であつた」。当時この登攀はフランスの新聞にアンナプルナに続く成功として大きく報道され、ちょうどその時パリに滞在していた私の父(大島堅造・会員番号一五五五)が、私に手紙で非常に難しい山のようにと書いて新聞の切抜きを送ってきたので、以来私の関心の深い山の一つである。トレイは最後に「フイツ・ロイの征服は、アルピニズムの歴史になんら特筆すべき局面を記すわけではない。しかし、私自身控え目に見積もつたとしても、これまで征服された地上のロック・クライミングの山としては、最難関の一つだと言える」と誌している。この山の冬季初登が行われたのは、今から数年前のことであつた。

今日自然保護活動の推進は日本山岳会の一つの課題であるが、開発とどの

ように調和させるかは難しい問題であろう。ユングフラウヨッホには日本からも多くの観光客が訪れて、アルプスの景観を楽しんでいるので、ユングフラウ鉄道に対し否定的見解をもつ人は、今日少くないと思われる。しかしこれが計画された時、スイスではどのような議論が行われたのであろうか。

第一巻に「ユングフラウ鉄道とアルプスの高所研究所」の記事がある。当初計画が発表された時、人々の間や国会で激しい議論があった。その時許可の決定的要因となったのは、会社が気象観測および地球物理学研究のための恒久的観測所建設に出資するとの条件であった。これは直ぐには実行されず開通後忘れられていたが、その後人々の記憶によりみがえり、今日のユングフラウヨッホの天文台と気象観測所が建設されたという。これは我々に一つの示唆を与えるのではあるまいか。なお第一巻にはユングフラウ鉄道の広告も掲載されている。

二十三年にわたるマウンテン・ワールドの発行の間に、約十人の方の追悼文が掲載されている。その中にジェフリー・ウインスロープ・ヤング追悼(第十三巻)がある。著者はアーノルド・ラン。ここにはヤングの生い立ち、交友、生活の信条、登山、著作を時代の背景とともに余す所なく描写してい

る。私はこの一文を読んで感動し、これを読む機会を与えてくれた今回の日本語訳の出版に感謝した。R・W・クラークはその著書『大登山家の歴史』(杉田博訳)で、ヤングをウインパー、マリリー、コリー、マロリー、ハントと共に六人の大登山家の一人として挙げてゐる。またヤングはマウンテン・クラフトの著者として有名であるが、第一次大戦前には多くの困難なルート初登攀を銚靴で行った。大戦が始まると三十八歳で従軍し重傷を負い、膝上から脚を切断した。しかしその後マッターホルン、グレボン等多くの登山を行ったという。なお終刊号第十七巻(一九六八/六九)にはこのマウンテン・ワールドを支えた一人マルセル・クルツの追悼が書かれている。そしてマウンテン・ワールドも二十三年の歴史を閉じた。

さて今回日本語訳が出版された意義はどこにあるのであろうか。ヒマラヤの高峯初登攀の時代の黄昏を迎えて、過去の栄光の追憶にふけるためだけであるうか。否、そうではあるまい。ここには登山の文学がある。これらの文章は人生の燈となるであろう。また今日アルピニズムがいずれの方向に向かわんとするのか、多くの問題を抱えている時に、先人達が何を求めて登山をしたかを今一度振り返ることは有意義

と思われる。しかも二十年前に終刊となったマウンテン・ワールドにはなお今日の報告もあるであろう。例えば最後の三冊に盛られたブータンの記事、写真である。

私共はこの大冊の日本語訳を完成させた監修者および多くの訳者と版元に感謝したい。残念ながら全巻購入の価格に優にネパールレッキングの一回の費用に匹敵する。だが幸にしてルーム図書室に全巻が版元より寄贈されている。また英語版の全十冊(第八巻以降)は望月達夫文庫に揃っており、名誉会員麻生武治氏の寄贈された一九五四年のフランス語版には *Viva La Montagne* とサインされている。最後に日本語版監修者のお名前を記しておく。近藤等、福田宏年、望月達夫、栗師義美、吉沢一郎。

一九八九年五月、本巻十七巻、別巻二巻完結、小学館刊 (大島輝夫)

#### 長編山岳記録映画

#### わが山、常念山脈

中沢義直制作

一般で言う日本の山岳映画は、登山をテーマとしたドキュメンタリーの作品を除いて、それらのほとんどは観光、紀行的なものである。ここで、山岳映画の定義について述べるつもりはな

いが、すくなくとも「山岳」をモチーフとした、そこに展開する山の自然と人とのドラマを描くものでありたい。

松本から、JR大糸線が安曇平を行くと車窓の左手に常念山脈が大きく連なる。なかでもひととき端正な三角錐の山が目をはひく。この特徴のある山が常念岳。北アルプスの前山として岳人たちにとってお馴染みの山でもある。

さて、山岳記録映画「わが山、常念山脈」は、題名の通り常念山脈をテーマとした作品。

制作者の言葉を借りれば、「この作品は、単なる山岳記録映画と言うよりも、常念山脈の稜線をテーマとした人間と山との歴史を描いたもの」という。画面は、山と里の四季折々の素晴らしさ、このような自然をはじめ人々の暮らし、風物などをおりまぜながら、たいへん克明に捉えている。内容は盛り沢山。さすが撮影に五年余りの歳月を費やしただけに、なかなか優れたカットも多い。

しかし、優れたカットだけでは映画にならない。そこが映画制作の難しさなのである。つまり、これらのカットをシーンとして捉え、しかもどのような限られた時間で構成するかが、問題なのである。上映時間五十分。これだけの長い作品だと編集にあたって十分な構成にたった演出設計をしないと、

せつかくの作者の制作意図と、狙いが稀薄になってしまふ。

作者、中沢義直さんは、常念岳を間近に見る安曇野生まれ。この山は作者にとって、言わば「わが山」であり、また「心のふるさと」なのである。このふるさとの山に思いを入れて映画をつくったことは素晴らしいことであるが、せめて三十分ぐらいにまとめて見たら、もっと濃くがあり、しかも感動を与えるような作品が出来上ったと思ふ。

優れたカットも多く、それぞれのシーンをよく捉えているが、構成にやや無理があるためか、作品全体の印象がぼけてしまっているのが惜しい。

フィルム制作による「山」の映画が少なくなってしまう昨今、このような大作を企画し、それに山の厳しい自然のなかを長期にわたり自主制作によって完成させた努力と情熱に対し敬意を表したい。

構成・撮影 中沢義直、音楽・後藤英雄、ナレーター・小林修、十六

(羽田栄治)

## 姨捨山の文学

矢羽勝幸著

海拔一二五二、冠着山(姨捨山)昔時は個々の山と見、二つの山が存在し

たようである。余りにも有名な、一茶の「信濃では月と仏におらが蕎麦」とおり更科は蕎麦の生産地であり、棄老伝説と信仰、月の名所の今昔を読む程に、長月の夜を興味深くし篠ノ井線の冠着ノ稲荷山に想いを馳せた。天曆五年大和物語から、古今、新古今集、更科紀行、善光寺名所図絵等数え切れぬ。

近時では広辞苑に至る記録。人物では、貫之、能因、西行、いせ、小町、俊成、定家から堀辰雄夫妻、宮柊二、井上靖と多彩。俳人においては、芭蕉を筆頭に曾良、木因、園女、蕪村、夢太、白雄、樗良、宗祇、一茶、少年期の亞浪、誓子、多佳子、民雄、虚子、年尾、立子、登四郎、子規は善光寺に立寄り通りすぎ「かけはしの記」には記述なく月の名所を黙殺。碑石も相当数あり、松宇、雙石、驥山、犀水の如く著名人が列している。詩歌、俳諧のなかには、想念だけで姨捨を詠じた作者もあった。一章から六章に渉り一章では、一期六期(室町末一八九八)に及ぶ。深沢七郎著「楳嶺節考」は一九五八に映画化され近代映画の傑作と謳われた。一九三八、更級紀行二五〇年祭に、犀水書による芭蕉翁の句碑を建立。

元日に田毎の月こそ恋しけれ  
一九八六年四月姨捨登り口に次の句碑

が。

登四郎  
枯れ果てゝ信濃路はなお雪の前  
翔

くるみ割るこきんと故郷鍵あいて  
少年期に文学碑の採掘に情熱を傾けたのが後年俳諧研究、近代文学に入ったきっかけであると著者は結んでいる。

(宇津清斗)

## 報告

### 新入会員の集い

総務委員会

平成元年十一月十六日(木)十八時三十分より、会室において「新入会員の集い」を開催した(対象は四月以降入会手続きを完了した会員)。

本年は、例年三月開催のオリエンテーションを待たず中間で懇親会を開き、新入会員が早く会になじめるようにするための初の試みであった。

当日は新入会員三十一名、総務委員会を中心に既会員二十一名が出席した。

松田常務理事の挨拶のあと、藤井理事から会の案内、事務局員の紹介、近く予定されている年次晩餐会、各集会等行事の案内があり、会の誇る図書室の案内の後会員手作りの料理等を囲んで懇親会に移った。

新入会員自己紹介のあと神崎会員の

音頭で乾杯し、和気あいあいのうちに会が進行し、最後に中川会員の指揮による歌の大合唱で二十一時近く閉会した。

今回は初の試みであったが、新入会員ができるだけ早く会に溶け込むためには良い機会づくりが出来たと思われる。この会に出席出来なかった方も会報『山』に掲載される各種集会に参加し、会の生活をエンジョイして頂きたいと考えます。委員会への参加等これから集会への参加から切っ掛けをつかんで頂きたいと思ひます。

〔出席者〕(委員会関係他既会員) 松田雄一、高遠宏、中川武、神崎忠男、石橋正美、関塚貞亨、藤井正彦、南川金一、藤田礼子、鳴原一男、菅野慶治、堀嘉余子、内藤勇、奥谷潤之輔、岩瀬秀郎、林栄二、足立孝也、中村昭、中条昌子、高良博人、祝迫重明

(新入会員) 古屋紘、加賀美均、石川恵子、松田祥二、清田明世、田中貢、福田光、阿部一孝、菅原修、仙石富英、鴨田英一、茂木洋子、上村信太郎、関戸紹作、八木英俊、谷田川広、永島治、園山鋭一、都築敏廣、袴田通孝、田久保や寿江、吉田彌、加藤久晴、辻川眞、立見忠園、渋谷千秋、小野里英次郎、羽田信也、清水紀亨、小澤みち子、並木亮

(岩瀬秀郎)

## 温泉を科学する

### 科学研究委員会

十一月十一日、十二日両日長野県奥蓼科にある渋温泉御殿湯で行われた。

当日は三々五々集合時間の午後五時までに集り、最終バスの到着を待って、早速大月短期大学田中収教授の講義が始められた。教授は構造地質学が専門であり、温泉は熱・水・断層（水の通り道）がなければ湧かない。それを見つけ出し、いくつもの公共機関の温泉掘削を成功させ、現在まで確率百パーセントだそうである。

講義は温泉の経済的価値に始まり、世界の温泉分布。各国での利用法。日本の温泉分布。山梨県がフォッサマグナ地域の要にあり、古い地質構造と新しい構造が斜交して、世界の中でも最も複雑な様相をしめしていることから温泉の泉温、泉質に変化があり、温泉の涌出する地質構造などについて、オーバーヘッドプロジェクトを使って分かり易く解説された。また教授自身が掘削された山梨県白州町の温泉の話も交えて、ユーモアあふれる一時間半の熱演であった。質問にも一つ一つ丁寧に答えられ有意義な秋の一夜となった。

## 雨具をめぐる

### シン・ポジウム(1)

### 科学研究委員会

標記のシン・ポジウムが平成元年十月十五日(日)午後一時半から五時まで、青山学院大学総合研究所ビル十一階会議室で行われた。講師は武庫川女子大学教授の安田武氏、ジャパンゴアテックス(株)の斉藤利忠氏、並びに東洋ゴム工業(株)の西川演氏であった。他にJAC側バネラーとして松永敏郎会員と中川武会員が選ばれた。

### ◇ ◇ ◇

最初に中川武会員のユーズーから見た雨具の変遷の話があった。戦後は放出のポンチョやビニール、やがて薄いゴム引き製品やシリコンゴム製品など出回ったが、いずれも完全なものではなかった。その後、ゴアテックスをはじめ、エントラント、ミズノテックス、ウバテックスなど比較的完全な製品とか、リッロン、ハイパロンなど優秀な防水布も出たが、数年しか耐用年数がなく、高価でゼいたく品といった

十二日は、風もなくよく晴れた空のもとと黒百合平へ向うか尾根を乗越し、唐沢鉱泉へと足をのびした。やや褐色になったとはいえ落葉松の紅葉を楽し

感じである。今後防寒防風機能まで備えた雨具の出現を期待したい。またS.M.Lの区別はあるても足が長過ぎたり等の不具合を感じている。

斉藤利忠氏からはゴアテックスの説明がなされた。ゴアテックスは厚さ四〇ミクロン程度のフッ素樹脂の薄膜に無数の小空孔を入れたもので、水滴は透さないが(防水撥水性)、空気や水蒸気など分子は透過(透湿性)という製品で、一九六九年米国で開発された。薄膜の表面汚染や孔詰まりを避けるため、膜の表裏をそれぞれ布地で蔽った三層から成る加工布が第一世代のゴアテックスである。ただし表面には

汚れがつき、摩擦などで撥水性も劣化するので、タグに指定されている洗剤で洗い、クロロカーボン系ないしフッ素系の撥水用スプレー(スコッチガード、アサヒガードなど)を半年に一度位かけた方がよい。ブラッシングは望ましくない。

ゴアテックス薄膜の内側(身体側)に吸湿用ポリアルキレンオキサイド層を張付け、全体で四層にしたものが、第二世代ゴアテックスで、これだと身

んだ。昼食には唐沢鉱泉の御主人がし留めたいのしし鍋を、唐沢のせせらぎを聞きながら屋外で味わい、視・聴・味の三つの感覚を十分満足させ、午後

体から出た汗が一旦この吸湿層に吸収され、水蒸気となって透湿膜を通過し、外に出るので、ムレが大いに緩和される。その後縫目もゴアテックス片を当てることにより浸水がなくなつた。ゴアテックスは海水、油、農薬も透さず、耐熱性にも優れているので、登山以外の目的にも多用されている。登山用には防風、快適性も考慮に入れさらに開発中である。

松永敏郎会員。ゴアテックスはせいぜい二年位しか持たず、雨具として消耗が早過ぎるように思われる。これは一つには登山活動が厳し過ぎるためで、リュックや背負皮がピッタリ身体に着けば、その部分では透湿性など考えられない。ザイルを身体にかけたり、ヤブ漕ぎをすれば、摩擦が加えられる。雪の上に腰を下ろすと、逆に外から湿気が入ってくる。透湿性の長所が、結局山では十分活かされていないのではなからうか。肩や尻には透湿性はないが、もっと丈夫で完全防水の材料をパッチワークでつける等、山の実情を考慮した雨具の開発を期待したい。|| 続く ||

(中村純二)

一時過ぎ唐沢鉱泉で解散した。

〔出席者・順不同〕 関口令安、高遠宏、松丸秀夫、高橋詢、奥野道治、中川武、斉藤桂、石田要久、中村太郎、

鳥居亮、久保孝一郎、山田哲郎、中谷充、千葉重美、井上節子、松田祥二夫妻、田中収、佐久間正子、大谷賀啓、橋本行雄、佐藤正子、保谷佳子、以上二十三名  
(石田要久)

## 第二二回図書交換会

### 図書委員会

一九八九年一〇月二日、午後二時より本会ルームにおいて例年通り開かれた。

今回の出品点数と売却点数(カッコ内)は、和書二〇五(一六二)、洋書一四(三)、和雑誌五八(三二)、洋雑誌三(二)。入札本は、三田幸夫著『山なみはるか』、田淵行男著『槍・穂高・常念岳』(ブルーガイド)、『東京市山岳部年報』、『登高行』全一七冊(復刻版)。

売上は一〇三、五〇〇円、一割をルーム基金、図書基金にそれぞれ充てていただいた。

出品者は一八名、参加者は世話役の図書委員を含めて三〇名。この数年、ほとんど顔ぶれの変わらぬ常連である。出品された本にも、これはというものが少なくなかった。そろそろこの行事のあり方を検討する時期にきたようだ。  
(平井吉夫)

## 北海道夏山行

### 「利尻・日高」

#### 北海道支部

#### ◎望月達夫氏を迎えて△利尻山△

新緑の六月、東京の望月氏から高澤光雄に「利尻に登りたい、誰か同行できる人を世話して欲しい」との久々の便りあり、早速人選した結果、今春野に下った水科行雄が日本富士完登を目指しているの、利尻富士はあれに案内役をと話がまとまった。

北海道支部では七月二十九日・三十日に前支部長大塚武氏の日高・神威岳七周忌追悼山行を計画しているの、これに前後して利尻山行を組んではと、故人との旧交の篤かった望月氏に連絡したところ快諾を得たので、早速準備にとりかかった。

折りしも現地利尻では、島に山岳同好会を作りたいとの話があるので、利尻在住の水産指導普及員河野象威氏と利尻町博物館西谷英治氏に現地世話役を依頼し、さらに北海道支部会員の同行者を募ったところ、道外の東京・三重など総勢十五名の大パーティとなった。

七月二十五日夜札幌を発ち、稚内からフェリーに乗り利尻島鰐泊港に着く、桟橋に河野・西谷両氏が出迎えて

くれて、あいにくの荒天続きで雲が低く、港近くのポン山すら姿を隠し、まして利尻山はここの十日程見ていないとのこと、さらに南西の強風で沓形稜からの登山は危険とのこと、ルートを変えしとりあえず北稜から長官山まで行き様子を見ることとし、登山口で名水「甘露泉水」を五ツのポリタン三本に詰めていよいよ出発となった。

途中横殴りに登山道を吹き抜ける風は凄まじく、雲の流れも慌ただしいが、第一展望辺りに来ると雲がぐんぐん上がって行き、時折長官山上部が見えるようになって来た。島の北北東の上空には利尻名物のレンズ雲が二層三層になって現れ、強風はまだしばらく続くものと見え、風に逆らっての登高ゆえ思うに進まず、ようやく長官山の肩にある利尻岳避難小屋に着く。もう午後二時を過ぎており、これ以上は時間的に無理として、荷を降ろし全員小屋に入る。一晚中風は吹き荒れて時折小屋を震えあがらせるが、全員疲れているのか早い眠りについた。

翌二十七日午前四時リーダーの水科行雄が「頂上が真っ赤だ、天気はいいぞ」の声でみんなを起こす。眠い目をこすり小屋から出ると今しも旭日が宗谷海峡越しにオホーツクから昇り、しばし歓声は止まなかった。しかし上空には相変わらず二層三層のレンズ雲が

風の強さを物語っており、利尻山頂上はやはり雲の中。だが九合目辺りまでは行けそうなので、早い朝食を済ませて有志十三名が頂上に向かった。相変わらずの南西の強風の中、黙々と歩を進め頂上を目指す。途中沓形からのルートを覗きこむも、吹き上げるガスは烈風を伴っていて至難、昨日ルートを變更して登ったのは正解だった。山頂の利尻神社の祠前で望月氏の音頭により乾杯のうえ記念撮影をなし、四囲はガスでホワイトアウト、長居は無用とほどほどに下山した。

帰りは予定より早く鰐泊に着いたので、宿泊先のペンション「岬」に荷をおろし、港口にあるベシ岬に登り一等三角点補点を確かめた。皮肉にも下山して間もなく利尻山は厚いベールを脱ぎ捨てて全山がよく見える。その夜利尻山の会発足の激励会を開き、地元の人男らと遅くまで語り合い酒を酌み交わし、翌日雲一つない好天気の中全員無事に島を離れた。翌週東京の女性登山者が頂上直下でガスと強風で沓形稜方向に滑落して一命を無くした痛ましい事故が報道された。

【参加者】 浅利欣吉、石崎貞子、岡田昭夫、河野象威、小須田喜夫、河村皆子、佐々木誠、佐々木順子、高澤光雄、西谷英治、平野明、藤野和雄、水科行雄、望月達夫、横田春雄

## ◎前支部長大塚武氏七周忌追悼山行

## △日高・神威岳▽

利尻山行を終えて一日間を取り、疲れがまだ残る七月二十九日午後一時に札幌大通りを出発し日高へ向かった。

支部山行として会員に案内し、大塚氏のご遺族・知人等総勢二十一名の大パーティーとなり、緑濃いニシオマナイ林道を七台のオフロードカーが突き進み、やがて浦河営林署の作業小屋に着く。同署の江沢弘志氏のご案内で小屋に入ると、大広間の床のカーペットも新しいものが敷き詰められており、丁寧な応対に感謝して、早速女性陣により大鍋いっぱいの名物石狩鍋が作られた。夜の更けるのも忘れて追悼懇親会が開かれ、早晩の降雨も知らず翌日の好天を夢に深い眠りについていた。

目覚めると林内は霧雨に煙り、沢音も目立ち出発が危ぶまれたが、誰とはなしに、お湿りの追悼山行もいいじゃないか、とばかりに予定通りに出発した。浦河営林署のお計らいで林道終点から上部の中の岳分岐までの登山道及び神威岳北西尾根の踏み跡は、この日のためよく整備され、難無く登高が続けられた。午前十時大塚氏のレリーフ前で読経と献花・注酒などで前支部長の遺徳を偲び、引き続き三浦勝幸がリーダーとなって大塚氏遭難の地神威岳にご遺族大塚謙一氏をご案内して有志

七名が向かった。午後一時山頂に立ち、雲間に見え隠れする中の川北面直登沢を望みご冥福を祈って下山した。

最初の渡渉地まで来ると、先に下山していたメンバーによる風流にも心尽くしの流しソーメンが出迎えてくれ、安らぎを与えてくれた。夜遅く札幌に戻り、それぞれ再会を約して家路に向かった。

本年役員新設の山行委員三名によるこの二つの劣拙な山行計画であったが、参加者の皆さんに大層喜ばれたことは、また来年への励みになった。

〔参加者〕 浅利欣吉、上野八郎、江沢弘志、大塚謙一、河村皆子、岸恒方、木下恵子、木村康宏、小須田喜夫、小林年、佐々木誠、中嶋英彦、新妻徹、芳賀孝郎、橋本誠二、平野明、藤野和男、三浦勝幸、水科行雄、望月達夫、山川力、横田春雄

(水科行雄)

## 熊本支部秋季例会

半年ぶりの山行となった秋の例会は、宮崎県との県境沿いに厩大な山体を横たえる白髪岳(一四一六<sup>米</sup>)に登った。

この山域は九州中央山地のほぼ南端に位置し、その昔、山道に迷うと容易に里へ出られないと言われていたほど

深い森林に被われていたが、近年は稜線近くまで伐採の手が延びている。

それでもなお山頂付近にはブナの新林が拡がり、「南限のブナ林」として国の自然環境保全地域に指定されている。

十月二十一日、肥後の小京都として知られる人吉の温泉宿に一泊。翌朝、人吉名物の朝霧のなかマイカーを連ねて出発、国道を東に一五<sup>分</sup>程進み、ここで国道と分れて林道に入る。

最近林道が山深くまで延びている山が多く、白髪岳も標高千<sup>米</sup>の登山口まで林道が延びており、車を使えば山麓の行程をかなり短縮できる。

左右に屈曲する林道を登るにつれ、湖さながらに霧の底に沈む人吉盆地を眼下に眺めながら、一〇時、登山口に着く。林道わきに駐車し、モミヤツガの巨木が繁る山道をひと登りで、尾根の小ピーク猪の子伏(一二三三<sup>米</sup>)を越える。

ここから山頂まで、あまり起伏の大きくない尾根に沿って約三<sup>分</sup>の行程。周囲には見事なブナの巨木がそびえ、あたりを覆う。

秋の清澄な空気の中、落ち葉を踏みしめ、鮮やかな紅葉に彩られた快適な尾根道を進む。

ところどころで、空の青さと、秋の日に黄色に輝くブナの見事なコントラ

ストに足を止めては、秋の情緒を満喫しながら、正午、鈍頂の一等三角点に到着。

自然林に囲まれた山頂は南側が切り開かれ、そこから視界が広がる。

さまざまな色彩を見せる山稜の上に霧島連山が大きく横たわり、その彼方に、遠く桜島が望まれる。

陽あたりのよい草の斜面に腰をおろし、素晴らしい展望を目の前に、ゆっくりと昼の弁当をひらく。紅葉と展望にめぐまれた、秋の好日に訪れるのにふさわしい山行だった。(田上敏行)



熊本支部秋季例会・白髪岳にて

# ルーム日誌

(11月)

- 1日 自然保護委員会
- 6日 評議員会
- 7日 青年懇談会、婦人懇談会
- 9日 理事会
- 15日 山研委員会、三水会

## 要望書

冬季五輪競技コースを岩菅山  
山域以外の県内既存施設の改修  
により実施すべきことに関する  
要望書

平成元年十一月九日

社団法人日本山岳会

一九八八年六月、日本オリンピック  
委員会は一九九八年冬季オリンピック  
開催の日本候補地を長野市に決定し、  
滑降とスノー大回転両コースを志賀  
高原の最高峰裏岩菅山(二三三七m)  
の西斜面に新設する計画をたてており  
ます。

冬季オリンピック競技を長野県下で  
開催すること自体については、本会も  
スポーツ団体の一員として積極的に協  
力すべきものと考えておりますが、そ  
の競技コースを新設するために、我々  
登山者の愛好してきた山の自然が失わ  
れることには大きな問題があります。  
我々登山者がその美しい自然を愛

- 16日 新入会員の集い、科学委員会
- 17日 高所登山委員会
- 20日 総務委員会、図書委員会
- 21日 常務理事会、資料委員会
- 27日 フィールド委員会
- 28日 自然保護委員会
- 30日 婦人懇談会

11月来室者450名

## 会員異動 11月

### 物故

|              |      |
|--------------|------|
| 小野 利次 (四八九四) | 11・1 |
| 原 始 (四四四七)   | 10・6 |
| 古市 義孝 (三二一七) | 11・6 |
| 木南金太郎 (八六〇三) | 8・31 |
| 白田 昌一 (四六三六) | 8・7  |

ております。

これ以上樹木を伐採することを伴う  
開発は、たとえオリンピック・コース  
であっても行うべきではないと考えま  
す。欧州の自然保護団体が国際オリ  
ンピック委員会に冬季オリンピックは既  
存施設を使用して開催すべきであると  
の意見を出しておりますが、この点は  
今や国際的常識となりつつあります。  
この様な点からも長野県の場合でも県  
内の既存の施設を使用して行うべきで  
あり、岩菅山山域に新たにスキーコー  
スを開くことは、世界の趨勢にも逆行  
すると思われま。

本会以上の理由により、岩菅山山  
域の開発を行わず、滑降およびスノーパ  
ー大回転の競技は岩菅山以外の県内の  
既存施設で実施することを強く要望  
します。

更に、既存施設の改修を必要とする  
場合も自然破壊につながらないこと  
を、併せて要望します。 以上

終身会員  
本片山数雄 (三〇八七)  
退会

吉川 正治 (七二九八)  
大島 民義 (九四三七)  
佐藤 次彦 (五〇三四)

## タンボチエ僧院再建協力

募金者ご芳名

五万円―梶山<sup>みちお</sup> 四万円―熊本支部  
二万円―柴田均二。一万円―高橋詢、  
小西奎二、太田敬、松井辰彌、中村太  
郎、鈴木郭之、村木潤次郎、望月達夫、  
金子宏、原真、吉田宏、秀島敏、片岡  
博、河野幾雄。五千円―奥原教永、高  
田真哉、堀井昌子、鳴原一男、相山之  
良、須藤節子、吉中登、入澤郁夫、有  
井琢磨。  
十二月八日現在累計一二二名、累計  
金額一、二五三、〇〇〇円。



☎ 234-6659

この電話で  
もお知らせ  
しています

## ◎自然保護講演会

藤平副会長に「自然保護」について  
自由に語っていただき、会員と自由討

## 図 書 受 入 報 告

## 図 書 委 員 会

## 平成元年8月受入図書

1. 日本ヒマラヤ協会編「神の山格長峰」同協会 1989(版元寄贈)
2. 日本ネパール協会編「シンボジウム・ネパール第15・16回 Vol. 15」同協会 1989(版元寄贈)
3. 同志社大学カント峰登山隊編著「遙か久恋の峰」毎日新聞社 1989(編者寄贈)
4. 太田 威著「ブナの森は緑のダム」あかね書房 1989(版元寄贈)
5. 庄司幸介著「ブナが消える」新日本出版社 1989(版元寄贈)
6. 神 憲明著「雲の上の支配人」山と溪谷社 1989(著者寄贈)
7. 新ハイキング社編「一等三角点の名山100」同社 平成1(富田弘平氏寄贈)

## 9月受入図書

1. 明峯山岳会編「北岳のうた」同会 1989(版元寄贈)
2. 林 弥栄監修「野に咲く花」山と溪谷社 1989(版元寄贈)
3. 林 克之著「村に灯がついた」山と溪谷社 1989(版元寄贈)
4. 本山賢司著「本山賢司の野歩び術」山と溪谷社 1989(版元寄贈)
5. 川喜多二郎著「ヒマラヤ・チベット・日本」白水社 1989(版元寄贈)
6. ジャン・ルイ・エチエンヌ著、竹内迪也訳「たった一人の北極行」白水社 1989(版元寄贈)
7. フォスコ・マライニ著「東洋への道」フォスコ・マライニ写真展実行委員会 1989(同委員会寄贈)
8. 日本山岳会婦人懇談会有志編「村井米子追悼集」同編者 平成1(版元寄贈)
9. 日本山岳会婦人懇談会有志編「川森左智子追悼集」同編者 平成1(版元寄贈)
10. S. Brawand "Erinnerungen an Yuko Maki" S. Brawand 1989(著者寄贈)
11. J. Friend "Classic climbs of Australia" Second Back Row. 1983(梶正彦氏寄贈)
12. E. Shipton "The six mountain-travel books" Diadem 1985(購入)
13. J. Perrin ed "Mirrors in the Cliffs" Diadem 1983(購入)
14. A. Rouse "A Mountains life" Unwin Hyman 1987(購入)
15. P. Hillary "Rimo" Hodder & Stoughton 1988(購入)
16. G. Child "Thin Air" Patrick Stephens 1988(購入)

17. N. Gillette, J. Reynolds "Everest grand circle" Mountaineers 1985(購入)
18. H.W. Tilman "The seven mountain travel books" Diadem 1983(購入)
19. K. Mason "Abode of snow" Diadem 1987(購入)
20. D. Bass and others "Seven summits" Aurum 1986(購入)
21. T. Hozel, A. Salkeld "Themystery of Mallory & Irvine" Jonathan 1986(購入)
22. G. Dingle, M. Perry "Chomolungma" Hodder & Stoughton 1986(購入)
23. J. Maria, A. Aldalur "Alpinismo Esparolenel Mundo" 1980(児玉茂氏寄贈)
24. P.T. Wright, B. Herger "The Canadian Rockies" Whitcap Books 1987(購入)

## 10月受入図書

1. 尾崎隆著「ヒマラヤ冒険家族」山と溪谷社 1989(版元寄贈)
2. 根深誠著「ヒマラヤを釣る」山と溪谷社 1989(版元寄贈)
3. T・ハーゲン著、町田靖治訳「ネパールーヒマラヤの王国ー」白水社 1989(購入)
4. 鉄道省山岳部編「日本山岳案内Ⅲ・Ⅵ・Ⅶ」博文館 昭和15, 16(古谷聖司氏寄贈)
5. 川那部・水野監修「日本の淡水魚」山と溪谷社 1989(版元寄贈)
6. 読売新聞社編「史上最強の登山家 山田昇」読売新聞社 1989(版元寄贈)
7. 雁部貞夫著「崑崙行」短歌新聞社 平成1(著者寄贈)
8. 児玉 茂編「Rombongan Rinjani '89」ロンボガン・リンジャーニ 1989(児玉茂氏寄贈)
9. 三枝輝雄著「諸国名山案内 6 中部」山と溪谷社 1989(版元寄贈)
10. 吉田昭市著「諸国名山案内 7 近畿・中国・四国」山と溪谷社 1989(版元寄贈)
11. 内田良平「エベレスト街道」山と溪谷社 1989(版元寄贈)
12. 長尾三郎著「精鋭たちの挽歌」山と溪谷社 1989(版元寄贈)
13. 近畿山岳愛好会編「創立15周年記念」近畿山岳愛好会 1989(版元寄贈)
14. 広瀬 誠編「越中立山古記録 第一巻」立山開発鉄道 平成1(版元寄贈)
15. 山田 格著「飯豊連峰と朝日連峰」山田 格 1989(著者寄贈)
16. 中華民国山岳協会編「中華民国山岳協会安全登山訓練中心落成記念特刊」同協会 1989(編者寄贈)

議を行いたいと思  
ます。ぜひおいで下  
さい。  
講師 藤平正夫氏  
(本会副会長)  
日時 二月七日(水)  
十八時三十分  
場所 日本山岳会  
ルーム  
自然保護委員会  
●女性会員  
全国集会の  
おしらせ  
本年十月六日(土)  
七日(日)各地から入  
りやすいコースで尾  
瀬沼の長蔵小屋に集  
り講演会などたのし  
い集りを持ちたいと  
思います。  
山岳会の中で、い  
つも女性ばかりで群  
れているのは好まし  
いとは思いません  
が、大勢の会員の中  
で女性だけでも顔見  
知りになれる機会が  
あれば企画しまし  
た。男性会員も歓迎

いたします。  
詳しくはまた、『山』に載せますの  
で、今年の秋の計画にぜひ加えていた  
だきますようおさそいいたします。  
燧燧登山もする予定です。  
婦人懇談会  
●図書委員会の催し  
(1) 第十八回山岳懇談会  
題目 一橋大学山岳部の歩み  
講師 吉澤一郎氏、望月達夫氏ほか  
期日 三月二十四日(土)午後三時より  
場所 山岳会ルーム  
(2) 第二十一回山岳図書を語るタペ  
テーマ ロシアの山と探検の本  
講師 田村俊介氏  
日時 三月二十八日(水)六時三十分  
より  
場所 本会ルーム  
●山スキー講習会のお知らせ  
次の日程で山スキー講習会を行いま  
す。詳細は別途個人別に送付いたしま  
すので、ハガキにご希望の講習会のナ  
ンバーを記入の上、ルーム(指導委員  
会)あてに連絡をしてください。  
①根子岳・四阿山(長野) 2月24日  
26日。テント泊、自炊。人数は制限

させていただきます。

② 八甲田山 (青森) 3月17日～19日

ホテル泊、婦人懇談会との共催。

③ 笹ヶ峰 (妙高) 3月31日～4月2日

山小屋泊、自炊。

●「後藤三男油絵展」

— 信州の山と安曇野を描く —

日時 平成二年一月十八日 (木) ～ 二十

四日 (水)

場所 東急日本橋店六階 美術画廊

●冬期マッキンリー登山と

気象遭難講演会

山田昇隊の冬期マッキンリー遭難に  
関連して左記のような講演会を開きま  
す。関心のある方は是非ご出席下さい。

記

日時 二年二月十七日 (土) 午後一時半  
より五時まで

場所 日本山岳会ルーム

講演題目と講師

○冬期マッキンリー登頂：植村直己物

語撮影隊 木本哲氏

○冬期ヒマラヤとマッキンリーの風の

比較：かもしか同人 大蔵喜福氏

○山田隊遭難時の気象の解析：日本気

象協会 奥山巖氏

会 費 五〇〇円 (予稿集など)

We are searching for members for 1990  
American-Japanese Arctic Mountaineering  
Expedition

In June, 10 to 12 people, half Ja-  
panese, half American will go where no  
man has ever been before! Climb moun-  
tains no one has ever climbed before!

We are planning a 3 week Ski Mo-  
untaineering Expedition to Ellsemere Isl-  
and in the Canadian Arctic.

We are looking for 4 to 5 Japanese.  
If you are interested, please contact either :  
ショーン A. ドーシュ (会員番号 10550) 〒  
237 船橋市山野町 190-3 コーポラス山野 307  
☎ 0474-37-0690 または、日本山岳会事務所  
☎ 03-261-4433 児玉まで

訂正 十一月号 (五三三号)

9 頁四段目終より八行目 一九〇七年  
(明治三十七年) ↓ 一九〇四年 (明治  
三十七年)

11 頁四段目終より四行目 で・す・ま・す・調  
し・で・あ・る・調

の誤りにつきそれぞれ訂正致します。

平成二年一月二十日

102 東京都千代田区四番町五十一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話東京 (03) 443-33

振替口座東京 314829番

東京都港区赤坂一三六

印刷所 株式会社 技報堂